

エリザベート・ゴスマンの想い出「女に生まれたのが間違い」⁽¹⁾

アドリアーナ・ヴァレリオ

もし自分の歴史・神学の研究にとって頼りになる基準点というべき師を一人思い浮かべるとするならば、私はた
めらわず、去る五月一日に九十一歳で亡くなったドイツ人神学者エリザベート・ゴスマン（旧姓ブラッケ、一九
二八〜二〇一九）の名を挙げる。

エリザベート・ゴスマンは、丁寧な物腰で控えめな話し方をする素晴らしい女性であった。昔の祖母たちがみ
なそうしたように髪を一つに結び、いつも微笑みをたたえ、大切な文章を読む時は鼻眼鏡をかけ、私とアイコン
タクトするひとであった。私がゴスマンと知り合ったのは、「ヨーロッパ女性神学者協会」(ESWTR)⁽²⁾が主宰す
る数多くの会議の一つだった。こうして、私は、自分に創造的な研究生活が拓かれたのは彼女のおかげであると
いう感謝を伝えたのであった。

エリザベート・ゴスマンは、一九五四年、学友のヨーゼフ・ラツインガー⁽³⁾と同じ時期に、カトリックの女性
として初めて神学博士号を取得した。ミヒヤエル・シユマウス⁽⁴⁾の下で執筆した博士論文のタイトルは『中世の教
義理解における受胎告知』である。しかしながら、一九六三年には申請した教授資格論文が却下され、ドイツ神

学界におけるアカデミック・キャリアから閉め出された自分の境遇を表現した彼女の言葉に従うなら、「女に生まれたのが間違い」の代償を支払うことを余儀なくされたのである。

神学のポストへの応募が三十七回も失敗に終わった後、ゴスマンは日本に暖かく迎えられた。文学研究の教授である夫ヴィルヘルム・ゴスマンと二人の娘とともに日本に渡り、四十年近く教鞭をとった。最初に上智大学で中世のドイツ文学を、その後聖心女子大学でキリスト教文学を担当した。そして、ヨーロッパに再び戻り、一七八八年に哲学の分野で教授資格を取得する。彼女はグラーツ大学、フランクフルト大学、バンベルク大学、ルツェルン大学およびザールブリュッケン大学から、名誉博士号を授与された。こうした一連の名誉博士号授与は、祖国で神学講座の常勤職を得られなかったという苦悩に対する埋め合わせとなった。

さらに、ミュンヘン大学哲学部は一九八四年に、彼女に研究プロジェクトを発足させる機会を与えた。このプロジェクトからゴスマンの主要な業績となった学術書のシリーズ「哲学史・神学史のなかの女性史研究史料集」(Archiv für Philosophie- und theologie-geschichtliche Frauenforschung)が誕生し、一九八四年から一九九五年の間に九巻もの学術書を出版し、女性のマイノリティとしての伝統、また「もう一つの道」^{オータナティヴ}としての伝統への関心を喚起することに焦点を合わせた。それが目指したのは、キリスト教の伝統の忘れ去られた一部を、多様な表現と視点において新たに発見することであった。ゴスマンは、およそ五〇年も前に、まだ認知されていなかった女性による「反・伝統」の存在を明らかにしていたのであり、だからこそ、中世から少なくとも十八世紀までの、男性の証言と等しい価値があると認められ、生きた伝統の構成要素となるべき女性独自の証言を与える重要な諸史料の研究に着手することができたのである。

画期的であったのは、エバ像および聖書解釈の歴史の研究である。すなわち、教父や神学者たち男性が人類最初の女性エバを、罪人・誘惑者として解釈し、この創造物語を根拠にして、女性を従属的な立場に置くことを正当化する非対称的な人間学を打ち立てたのに対して、多くのキリスト教女性思想家、例えば神学者ビンゲンのヒルデガルド、神秘家マクデブルクのメヒティルト、人文主義者クリスティーヌ・ドゥ・ピザン、文学者ルクレツィア・マリネツラ、文筆家マルゲリット・ビュフェ、プロテスタント自然科学者ドロテア・エルクスレーベン・レポーリンらは、オータナティヴな聖書解釈を提示して、女性に尊厳と肯定的な地位を回復してきたのである。この叢書によって公刊された、手つかずの近世史料、いわゆる「女性論争」⁽⁵⁾に関する史料の諸研究から、驚くほど生き生きとした聖書解釈手法が明らかになり、女性だけでなく、男性も、独創的、多視点的で魅力的な聖書解釈研究に巻き込まれたのである。

こうした研究は、私や他の女性研究者が、女性による聖書解釈の歴史の研究を始める動機となり、これが、国際的かつ宗教横断的な大プロジェクト「聖書と女性」⁽⁶⁾につながった。このプロジェクトでは、「イタリア神学者協会 (CIT)」の後援により、「ヤコブの泉社」から、聖書解釈や受容史に関する研究が10年以上にわたって刊行された。エリザベート・ゴスマンの論考「ビンゲンのヒルデガルドの著作における聖書解釈」⁽⁷⁾は、私とカリー・E・ビヨレセンが編者である『女性と中世の聖書』に収められているが、彼女の先駆的な研究がかつて拓いた方向性を推し進める意義あるものであった。そのことに、私は感謝と賞賛を捧げずにはいられない。(オッセルヴァトーレ・ロマーノ紙二〇一九年五月九日)

アドリアーナ・ヴァレリオは、イタリアの歴史学者・神学者で、「聖書と女性」シリーズの編者の一人。

訳註

- (1) 自伝『女に生まれたのが間違いない或るカトリック女性神学者の回想―』(*Geburtsfehler: weiblich. Lebenserinnerungen einer katholischen Theologin*, Iudicium Verlag, München 2003) のタイトル。
- (2) *European Society of Women in Theological Research*, 一九八七年設立。筆者アドリアーナ・ヴァレリオは、二〇〇三年から二〇〇七年まで、会長を務めた。
- (3) ドイツの神学者。後のローマ教皇ベネディクト十六世。
- (4) ドイツの神学者。一九五三年に設立されたミュンヘン大学のマルティン・グラープマン研究所の初代所長。
- (5) 「女性論争」(*querelle des femmes*)とは、十五世紀から十八世紀にかけて、女性の性質や能力に関して起きた広範かつ長期的な議論を指す。
- (6) *The Bible and Women: An Encyclopaedia of Exegesis and Cultural History*, シェンダースタディーの観点から、西洋の聖書解釈と文化の研究に関する研究書が、英米、独、伊、西の四つの出版社から刊行されている。
- (7) Elisabeth Grössmann, "Biblical Interpretations of the Work of Hildegard of Bingen (1098-1179)", in *The High Middle Ages*, ed. by Kari E. Borresen and Adriana Valerio, (*The Bible and Women: An Encyclopedia of Exegesis and Cultural History*, vol. 6.2, Atlanta: SBL Press, 2015) なお、文中の『女性と中世の聖書』は同書のイタリア版の表題である。